



中高生とともに差別と闘う

『本当に大切なものは目に見えない』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



一昨年の「中学生集会」で

人権をテーマに中学生が集う、「人権を語り合う中学生交流集会」(以下「中学生集会」)を始めて、二十四年が過ぎました。

毎年七月末に開かれる本大会のため、四月から毎月一度、準備会として集まるのみです。四月、五月、六月、七月と、PTA総会や部活動の大会、定期考査といった学校行事の隙間を縫うようにして、県内近隣の中学生が集います。出会い、交流し、親交を深め、互いの中にある、互いの学校の中にある、いじめや差別、人権問題、日ごろ「おかしいな」と感じていることを出し合っていきます。

出会うのは、本大会も入れてたったの五日。たったの五日間なのに、そこには何か特別な絆というか、つながりのようなものが生まれていきます。それは中学生同士もそうですが、私と他校の生徒の間にも、不思議なつながりが生まれていったような気がします。本当に貴重な、かけがえない時間です。

昨年の会について紹介したので、その前に、一昨年の会に参加していた女の子が、最後に語ってくれた内容について紹介したいと思います。

この中学生集会、中一から三年続けて参加するのが理想的です。参加した一年目に発表するのはなかなか難しいのですが、それが二年目になると、「去年の雪辱を！」とばかり

に奮い立ちます。でも、頭に血が上り、何をどう言ったかまったく覚えてなくて、やっぱり後悔。それでまた、「去年の雪辱を!!」とばかりに、三年目に奮い立つわけです。ここまでくれば、「中学生集会命」ですね。(笑)

でも実際は中一から参加する子は少なく、中三になった二年だけという子が多いのが現実です。先に述べた女の子も、中三になって初めての参加でした。にもかかわらず、彼女は実行委員長に立候補するという意欲の持ち主でもありました。

閉会行事の総括で述べた彼女の最後の言葉はどこか、人権学習の本質を突いているような気がするのです。そんな彼女の生の言葉を、どうぞ。

本当に大切なものは目に見えない
「総括のまとめというか、完全に自分個人の意見になるので、ちょっと長くなるんですが。

私の好きな言葉で、サンレテグジュペリの『星の王子様』っていう本の中に、『本当に大切なものは目に見えないんだよ』っていう言葉があつて。本自体は読めていないんですけど、この言葉だけは聞いたことがあつて。聞いたときに、そうだなって素直に思えたんです。人権とか、人の心とか考え方とか、何より大事なもののに、絶対に見ることは基本的にできなくて。

学校とかでも人権の勉強をするじゃないですか。でもああいう時って、

ガチのことを言えば、『何お前マジになってんの』って言われるし。そんなこと言われて自分の考えを否定されるぐらいなら、適当に流しとけばいいか。適当に、『差別は駄目だと思いません』とか、『人権を大事にしましょう』とか書いて提出して終わり、みたいなしとけばいいかと思っていました時期があつて。人権って、考えるのが面倒くさいし、答えはないし、どうでもいいかと思ってた時もあった。

今は生徒会の専門委員会の人権委員会に所属しているんですけど、所属しているのに、『人権って何? 差別って何?』って訊かれても、『人権は』大事なものとかが、『差別は』してはいけないものとか、それぐらいの漠然としたことしか答えられなくて。何がなんだらうって思ったりしたんです。

思ったことが素直に言える場

「けど」(中学生集会)って、基本的に自分の意見で否定されないんです。反対意見や違う意見があることはあっても、根本から、『お前のそれはおかしい』って言われることはないうって分かったんです。自分が思っていることとか、自分にあつたこととか、素直に心を割って言える場所って、結構大事だと思うんですよ。そうでないと、昔の私みたいに、『人権なんかどうでもいい』ってなってしまうと思うんです。そのせいで、本当に大事なものを、『どうでもいい』って

捨ててしまう可能性もあったわけだから、この会に参加したことで、本当に大事なものが何なのかって、ちょっと気づけた気がしました。

人権って面倒くさいものではあると思うし、それを無視して生きていくのは楽かもしれないですけど、でもそういうのを無視せずに、真っ正面から向き合って生きていける人になれたらいいなと思いました。ありがとございました。

「どうしてそんなに面倒くさいことにわざわざ首を突っ込むの?」と、意地悪く思ったりもするのですが、それは自分に向けた問いでもあるのでやめておきます。

でも言えるのは、純粋に、真っ直ぐに生きていきたいんだと思うんです。それを友達に否定されることもあれば、先生もあまり協力的でなかったりもすることもある。それでも自分なりに、『自分の何がおかしいんだろう』『自分のどこが間違ってるんだろう』と、考えに考える子もいるわけなんです。そんな子たちの声をしっかり受けとめられる学校、教育でありたいと思います。そんな思いを学級や学年みんなで共有し、共に歩める学校でありたいなと思うのです。

彼女の発言は、人権学習の有り様を上手く捉えた言葉だと思います。次号からしばらく、そんなやりとりを、昨年の中学生集会から拾いあげていきたいと思えます。